BLUER THAN THE SKY

大政奉還

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＵＥＲ　ＴＨＡＮ　ＴＨＥ　ＳＫＹ

【Ｎコード】
Ｎ０８４９Ｑ

【作者名】
大政奉還

【あらすじ】

ふたつの月が彩る異世界ハルケギニア。
その裏世界で【雪風の悪魔】と恐れられる、北花壇警護騎士団の一員Ｎｏ，０７タバサ。
彼女の凍てついた心を溶かすものは現れるのだろうか・・・

Prologue（前書き）

もう一度ゼロの使い魔に挑戦。

Prologue

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

一人の男が森の中を走る。
もう真夜中と言っていい時間。
不気味に並ぶ双子の星、二つの月が、男にはナニかの禍々しい瞳に思えた。
そう感じてしまうほど、気味の悪い空気がこの森一帯を覆っているのだ。
感じる死の予感。
それを振り払うように懸命に足を動かす男だったが、足元の木の根に躓き・・・・・

「はっ、はっ、ぐッ！」

転倒してしまった。

「あ、あああ、あああああああああ・・・」

震える身体。
そのまま這いずるように動き、大木を背に座り込む。

足を捻ってしまい、もう走れそうにない。
その時・・・・・

「ッ！？　ぎゃあああああッ！！！」

小枝程の氷の槍が男の右腕を貫き大木に固定した。
夜の闇に紛れ放たれた氷槍。
男は半狂乱になりながら叫ぶ。
しかし、ここは森の中、助けは来ない。
と、月明かりに照らされるように、闇の中から一人の人間が出てきた。
背は低く、黒いロングコートとその中にも黒のハイネック、更に黒のズボン。
そして顔には対照的な真っ白で、二つの目が描かれただけの、のっぺらぼうを思わせる仮面。
蒼い髪が短く整えられていた。
少年にも少女にも見える。
そんな人間だった。

「はあ、はあ、はあ・・・な、なんでだ、なんで俺を！？」

震える声の男の質問に、仮面の人間はロングコートの内側、腰にある大きなナイフを抜きながら答えた。

「隙を探っているようだが・・・無駄。　ロマリアの間諜、バレた時の覚悟くらい出来ている筈」

そう呟き、男まで一メイルのところまで歩み寄る。
すると男は急に黙り込み・・・

「・・・ファイヤボ・・・・・・ッ」

呪文を唱えようとして、投擲されたナイフに胸を貫かれた。

「この距離ではナイフの方が速い」

「ごほっ・・・ごぷっ・・お、お前・・・」

血を吐く男。
突き刺さったナイフの柄には細く強靭な糸が結ばれており、引っ張ることで手元にナイフを戻す事が出来る。
氷槍に貫かれていない左手で胸を抑える男だったが、心臓が傷付いたようだ。
おびただしい量の鮮血がだくだくと流れ続ける。

「ゆ、雪・・風の・・・悪・・・・魔・・・」

Episode:1 GO TO SCHOOL

ここはガリアの首都リュティス。
隣国トリスティインの国境から、おおよそ千リーグ離れた内陸部に位置している、人口三十万を誇るハルケギニア最大の都市である。その東端にはガリア王家の人々が暮らす巨大で壮麗な宮殿、ヴェルサルテイルがある。
かつて森だったここを開き、美しく偉大な荘園を造り上げたのは、先々代の王、ロベスピエール三世。
現在の主である王ジョゼフ一世は、その中心グラン・トロワと呼ばれる青色の大理石で組まれた建物で、政治の杖を振るっている。
そのグラン・トロワから離れた、プチ・トロワと呼ばれる薄桃色の小宮殿の中で、一人の少女が大きなため息を吐いていた。

「・・・はあああ」

年の頃は十七。
細い目に、その瞳と同じ青みがかった髪。
その色はガリア王家の血を引いていることを見た目にわかりやすく表している。肩まで伸ばされた青髪は丁寧にすかれ、絹の糸のように柔らかくさらさらとそよぐ。
豪華な冠によって前髪を持ち上げられ、滑らかな額が覗いている。
ジョゼフ王の娘、ガリア王国王女イザベラであった。大きな机に広げられた報告書の内の一枚を手に取り、イザベラは手元のベルを鳴らした。

一人の侍女が部屋に入ってくる。

「お呼びで御座いますか、殿下？」

「この報告書、どうなってるのよ？　わたしはＮｏ，０７にこんな仕事を頼んだ覚えは無いんだけど？」

「は、少々失礼します」

そう言って報告書を受けとる侍女。

「・・・・・おそらくは、例の上層部貴族の仕業ではないかと」

「やっぱりね。　まったく、この【北花壇警護騎士団】の団長を差し置いて、勝手に任務をだすなんて」

別名【薔薇園】とも呼ばれる、季節の花々が咲き乱れるヴェルサルテイル宮殿には、無数の花壇が存在する。
由緒あるガリア騎士団は、その花壇の名前にちなんで命名されているのだ。
南薔薇花壇警護騎士団、東百合花壇警護騎士団・・・・・
しかし、北側には花壇が存在しないため、【北】が名前に入る騎士団は表向きには存在しない。
が、王家の裏舞台に、唯一【北】の名前を持つ騎士団が存在した。

それが北花壇警護騎士団である。
ガリア王家の汚れ仕事を一手に引き受けている組織であった。
国内や国外で起こる様々な裏の面倒事が持ち込まれるのだ。
イザベラはそこの団長なのである。
一応は騎士団だけに、様々な【騎士(シュヴァリエ)】を抱えている。
お互い顔も知らない、名誉とは無縁の裏の世界で生きる騎士たち・・・
・
それが北花壇騎士なのである。

「それで、Ｎｏ，０７はまだ来ないの？」

「シャルロット様はまだお見えになっておりません」

「あの娘はもうその名を捨てたわ。　呼ぶならＮｏ，０７か、もしくはタバサにしなさい」

は、はい・・・と口ごもる侍女。
今からイザベラを訪ねてくる者はガリア王家の血を引く・・・・・、
イザベラの従妹姫なのである。
王家の権利と名前を剥奪されたとはいえ、召使に過ぎない自分が乱暴な態度をとれるはずがない。

※※※※※※※※※※※※※※※

プチ・トロワの前庭に、ゆらりと白の仮面と黒のロングコート姿をした背の低い、少女とも少年ともとれる者が現れた。
入り口に控えた衛士が寄ってきて、敬礼する。
仮面は僅かにうなずき、建物の中に入って行った。

※※※※※※※※※※※※※※※

王女の部屋の前に立ったガーゴイルが交差させた杖を解除する。
ガリアでは他の国に比べ、意思を持たされた魔法像【ガーゴイル】の使用が盛んである。
独立した疑似意識で動くガーゴイルを至るところで用いられているガリアは、それだけ魔法が発達した国なのであった。
天井から垂れ下がった分厚い生地のカーテンをめくり、部屋に入る。

「Ｎｏ，０７、任務完了」

平坦な生気のこもらない声でＮｏ，０７はイザベラに言った。

「分かったわ。　ご苦労様。　・・・・・楽にしていいわよ」

イザベラはソファーに座るように促した。
Ｎｏ，０７は言われた通りソファーに腰掛け、仮面を取り、懐から取り出した赤渕の眼鏡を掛ける。

「ふ～。　ただいま、お姉ちゃん！」

すると急にはりつめていた空気がなくなった。

「はあ・・・　タバサ、あんた任務の時と平常時で人格が違いすぎじゃないかしら？」

「もう、なに言ってるのお姉ちゃん？　そんなの何時も仕事モードじゃ周りに警戒されちゃうからに決まってるでしょ？」

微笑むＮｏ，０７いやタバサ。
顔は笑っているように見えるのだが・・・・・瞳がまったく笑っていないことが、長い付き合いのイザベラには分かった。

「そう、あくまでもそれは一般人に溶け込むためだったわね」

「その通〜り！」

はたから見れば姉妹が楽しく会話しているように見えるのだが・・・演技だと分かってしまうイザベラにとってタバサはどうも調子が狂う相手だった。

「ええと、それで帰ってきて早々悪いけど、次の任務・・・と言うより命令よ」

「え〜、ぶーぶー、この後パフェ食べに行こうと思ってたのに〜」

「そうかい、そりゃ残念だったわね。　あなたにはトリステインの魔法学院に入学してもらいます」

「魔法学院〜？　しかもトリステインの〜？　なんでなんで？　あ、分かった！　お姉ちゃん、私が任務で怪我するのが心配だからでしょ？　トリステインの魔法学院ならいちいち戻って来るのが面倒になるから、任務の頻度も減るしね」

「やかましい！！　ちょっと仕事モードってやつに変わってなさい！」

「え～・・・了解」

「ごほん。　それでは十日後に魔法学院に向けて出発してもらいます。　それまでに準備をすませておくように」

「了解」

そう言うと、タバサはソファーから立ち上がり、入り口へ向かった。

「それと・・・」

「？」

「友達ぐらい作りなさいね？」

「・・・・・何故？」

「え？」

「友達・・・と言う言葉は知っている。　しかし、何故私が作らな

ければならないのか分からない。　必要ないし、邪魔になる。　合理的でない」

「・・・ああもう、細かいことはいいわ。　とにかく命令よ」

「・・・・・了解」

こうして、北花壇騎士Ｎｏ，０７タバサはトリステイン魔法学院へ入学することになったのだった。

Episode：2　SCHOOL　LIFE

トリステイン魔法学院にタバサが入学したのは、春の香り漂う四番目の月であるフェオの月の第二週、ヘイムダルの週の半ばだった。
式はアルヴィーズの食堂で行われる。
そこで毎年九十人ほどの入学者たちは三つのクラスに分けられるのだ。
様々な地方から来た貴族の子弟たちは、これからの生活を思い浮かべ、ちょっとした緊張と興奮の色を浮かべている。
と、学院長のオスマン氏が教師たちを引き連れて中二階に現れ、生徒たちを見渡した。

「生徒諸君。　諸君らはトリステイン・・・・・、いやさ！」

大仰な身振りで、とう！　と中二階の柵から飛び降り、一階のテーブルに降り立とうとするオスマン氏だったが・・・・・

「あべしっ！？」

【レビテーション】の詠唱が間に合わず、テーブルに激突。
辺りは騒然となり、教師たちが駆け下り介抱した。
ヤバイ痙攣をおこしていたが、誰かがかけた水の魔法でなんとか回復。

悪びれもせずに立ち上がり、何事もなかったかのように口を開く。

「諸君！　ハルケギニアの将来を担う有望な貴族たれ！」

・・・・・立派な言葉だった。
そんな中、居並ぶ貴族の中にタバサはいた。

（・・・・・まったく、無駄な事を・・・）

いいかげん退屈になってきたタバサは、持ってきた本を開き、内心毒づいた。
本の内容は魔法学院で学ぶ内容より二回りほど高度なのだが、スイスイと目を通していく。

（なんで私が学院なんかに・・・　ふう、長期のカモフラージュ訓練だとでも思うしかない・・・・・疲れるけど）

さて、そんなタバサの隣には赤い髪のまるで美の女神のようなプロポーションをした女が座っていた。
すると、女の目がいじめっこのようにピカーンと光った。
タバサの本を取り上げようと手を伸ばし・・・

「よっ」←タバサ

「！」

「ほっ」

「！！」

全て捌かれた。

「や、やるわね」

「貴女こそ・・・って、なんでわたしの本を取ろうとしたんですか！」

「あらごめんなさい、ちょっと気になっちゃって、つい手が出ちゃったわ」

「はあ・・・？」

「ふふ、あなた面白いわね、興味がわいたわ。　私の名前はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプスト

ー、キュルケでいいわ。　あなたは？」

「むう、名乗られたからにはこっちも名乗るしかないですね。　わたしはマルグリット・ド・サリヴァンです」

思いっきり偽名を名乗るタバサ・・・・・、いや、この【タバサ】自体も偽名なのだが・・・

「ふ～ん。　ま、よろしくね、マルグリット」

キュルケは意味ありげに笑った。

「はい、こちらこそよろしくお願いしますね、キュルケさん」

いつの間にかクラスわけの説明を行っていた教師が、キュルケとタバサを睨んでいた。

「そこのあなたたち！　今、先生がたが大事な話をされてるのよ！
　お黙りなさい！」

桃色がかったブロンドの少女が立ち上がる。

「あなた誰？」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！　あんたたちみたいな子がいるなんて驚いちゃうわ！」

「ラ・ヴァリエール？」

嬉しそうにキュルケはルイズの顔を見つめた。

「よろしく。　ちなみに私はキュルケ・フォン・ツェルプストー。お隣さんとお会いできるなんて光栄だわ」

ルイズはその言葉を聞くと震えだした。

「な、な、なんですってぇぇぇ！？」

その形相、鬼のごとし・・・・・

よろしくね、とにっこり微笑んだキュルケ。

そんな様子を青筋を額に浮かべながら見ていた一人の先生がかつかつと寄ってきて、三人に怒鳴った。

「静かにしたまえ！」

入学早々目立ってしまったことに、苦笑するタバサだった。

※※※※※※※※※※※※

朝日もまだ昇らぬ早朝に、タバサは目を覚ました。
手に握るのは、魔法発動体として契約した刃渡り二十センチメイル程で片刃のナイフ二本。
ちなみにタバサは他にも、何時も腰に巻き隠し持っている、自在に伸び縮みするワイヤー？のような物とも契約を結んでいる。
ナイフを鞘にしまい、寝間着のパジャマから着替え始めた。
もはや職業病のようなもので、タバサは武器をなにかしら握りながらでなければ、寝ることが出来ないのだ。
着替え終わる。
Tシャツに半ズボンという動きやすい格好、軽く屈伸したりし、筋肉をほぐす。
一通りストレッチを終えると、伊達であるメガネを掛けた。

「・・・・・さてと、今日も一日、頑張るぞ～、オー！　・・・・・ふう」

メガネを外す。
このメガネはタバサにとっての切り替えスイッチ。
メガネを掛けている時は演技・・・というよりも役になりきるのだ。
だが、朝からは流石にテンションがついて来なかったらしい。

「私はド・サリヴァン家のマルグリット、ここはトリステイン魔法学院で、団長イザベラの命でここに入学した・・・後の行動は指示を受けるまで学院の生徒として生活、・・・・・友達を作れ・・・？　・・・・・よし」

自分に言い聞かせるように呟くと、壁に飾られている今は亡き父シャルルの肖像画を見つめた。

「・・・・・行ってくるね」

軽装のまま音もなくドアを開け、タバサはトレーニングに向かった。

※※※※※※※※※※※※※

トリステイン魔法学院の食堂は、敷地内で一番背の高い、真ん中の本塔の中にあった。
食堂にはとてつもなく長いテーブルが三つ並んでいる。
一年生のタバサのテーブルは正面向かって右側だ。
一階の上にロフトの中階があり、そこで先生のメイジたちが、歓談に興じている。
テーブルにはいくつものローソクが立てられ、花が飾られ、フルーツが盛りつけられた籠がのっている。
タバサはテーブルに並ぶ、豪華な料理の数々に驚き目を輝かせた。

「うわぁ～」

思わず出てしまった声で、周りの生徒の注目を集めてしまい、恥ずかしそうに席につく。

（こ、この料理・・・・・出来る。　なんで周りの生徒たちは平然としてられるのか理解できない）

自身もかなりの料理人としての腕前を持つタバサは、目の前に並ぶ料理を作った料理人を内心で称賛した。

（・・・惜しむらくは、食べる相手が素晴らしさを理解できてないことと・・・・・あと料理人自身の不満か・・・　いくら丹精込め

て作っても、分かってもらえないんじゃしょうがないのかもしれないけど・・・・・）

周りを見渡すタバサ。
いつの間にか食前の始祖ブリミルへの祈りは口パクしているうちに終ってしまったようだ。
生徒たちは一口料理を食べただけで、残す者や、あまつさえ手をつけてすらいない者もいる。
一瞬、殺意がわいたタバサだったが、なんとか押し留め食べ始める。

（・・・美味。　この料理が毎日食べられるだけでも、入学した甲斐があった）

凄まじい速度で手を動かし、あっという間に完食してしまった。

※※※※※※※※※※※※※

食後、さっそく授業だ。
タバサが教室に入ると、先にやって来ていた生徒たちは談笑していた。

視界の端にはクラス分けで話し掛けてきたキュルケが、周りを男子に囲まれ祭り上げられているのが見えた。
席に座り、持ってきていた本を開くタバサ。
しばらくすると、扉が開き先生が入ってきた。
年の頃は二十代前半ほど。　灰色のローブに身を包み、腰まである銀色の髪をした女だ。
どことなく顔立ちが、クラス分けでキュルケと睨み合っていた桃髪の少女に似ているような、似ていないような・・・

「はい、注目！　トリステイン魔法学院へようこそ、私は一年生のあなたたちを教えることになった、イールズです。　まあ、ぼちぼちよろしくね」

イールズと自己紹介した女は教室を見回して言った。

「えー、みんなには魔法の基礎であるコモン・マジックを教えていきます。　一年生の中盤からは、少しずつ系統魔法の方にも入っていくから、しっかり勉強するように。　それじゃあさっそく・・・
　まず魔法には【火】【水】【土】【風】そして今では失われた【虚無】を合わせて、五つの系統が・・・」

イールズ先生の授業が始まって早々、タバサは開いていた本を机に立て、その影で居眠りを開始したのだった・・・

Anecdote:0 THE SCENE GRAVEN ON HER M

シャルロットが目を覚ますと、そこは見知らぬ小屋だった。
ぼおっとした頭をなんとか働かせて、状況を確認しようとする。
立ち上がろうとして、自分が縄で縛られていることに気が付いた。
首だけ動かして周りを見回すと、五人の男たちがいる。
ここまできて、ようやく思い出した。

（・・・・・そうだ。　わたし、誘拐されたんだった・・・）

※※※※※※※※※※※※※

ガリア王国には二人の王子がいた一人は幼い頃から魔法が使えず、
無能と陰で蔑まされた、兄のジョゼフ、もう一人は幼い頃から魔法
の才に恵まれ、百年に一人の天才とまで言われた弟のシャルル。
仲の良かった二人。
やがて二人は成長し、王座をどちらか一人が継ぐ時がやって来る。
ガリアは二つに割れた。
ジョゼフを推す、ジョゼフ派。

そしてシャルルを推すシャルル派。
当然のように大多数がシャルル派についた。
しかし・・・・・、選ばれたのはジョゼフだった。
弟への劣等感に押し潰されそうになっていたジョゼフはシャルルに言った。
自分の方が優れていた、と・・・・・
この時、シャルルがやせ我慢をして平気な顔をしていたら、ジョゼフは暴走していたかもしれない。
しかし、シャルルは告白した。
自分は裏金を使い、味方を増やしていた、と。
そこまでやってすら、王になることは叶わず、悔しい、と・・・・・
涙ながらの告白やに、ジョゼフは思った。
自分はいったい何をしているのだ、と。
そして誓った、二人で国を良くしていこう、と。
そして、その後・・・・・シャルルは自殺した。
知らせを聞いたジョゼフは耳を疑った。
自分と国を良くしていこうと誓ったシャルルが、自殺するなど考えられなかったのだ。
絶望しそうになる心に鞭を打ち、真相を解明しようとするジョゼフ。
だが、ボロボロの心にトドメを刺すかのように届く、オルレアン公夫人の毒による心神喪失報告。
自身の出した覚えのない命令。
確実に裏で何かがあると確信するジョゼフだったが、すでに心は限界だった。
毒を盛った貴族を処刑するが、そちらに気をとられ、対応が遅れた。
シャルルの愛娘、シャルロットの誘拐。
護りたい者を一人も護れない、自分の無力さに絶望してしまう・・・・・
同時に目覚めた、【ある力】
必ずや、シャルルを殺した者を・・・いや、殺した組織、その属し

ていた国すらも滅ぼす・・・
狂気と言っていい復讐心に取り付かれるジョゼフ。
しかし、シャルロットの行方は不明。
生存は絶望的だった・・・・・

※※※※※※※※※※※※※

「い、いや・・・嫌だ・・・・・・」

両手両足を縛られ、横たわっていたシャルロットは震えていた。

「お、やっと起きたか、嬢ちゃん。　心配したんだぜ？」

「ああ、まったくだ。　寝てる間にヤッちまっても、俺たちが楽しくねえからな」

「へへ、どうでも良いからさっさとヤッちまおうぜ？　　俺はもう我慢出来ねえ」

「そうだそうだ。　それにこんだけ上玉だ、うまく調教すりゃあ高く売れんだろ？」

「まあ待て、そう慌てんなよ。　先ずはこの薬で・・・・・」

不穏なことを言い合いながら、シャルロットに近づいてくる四人の男。
残りの一人、黒尽くめの男は目を瞑り、腕を組んで、壁に寄り掛かっていた。

「やだ、こっちに来ないでよ！」

シャルロットは自由にならない身体をなんとか動かし遠ざかろうとするが、すぐ壁にぶつかってしまう。
懐から掌に乗るくらいの小瓶を取り出した男が言った。

「なーに、気にすんな。　痛いのは最初だけだ。　この薬を使えば、すぐ何にも考えられなくなるさ・・・・・ひひ」

そして、シャルロットにその小瓶の中身を振り掛けようと・・・・・

「・・・・・やめだ」

壁に寄り掛かっていた男が、急に呟いた。

「あ？」

それと同時に、ベチャ・・・という、まるで肉の塊を地面に落としたような音。
小瓶を持っていた男の腕が、・・・・・床に落ちていた。
そして、細切れになる身体。
シャルロットには何が起きているのか分からなかった。
自分に近寄ってきた四人のうちの一人が、いきなり肉の塊になったのだ。
動揺しない方がおかしい。
現実味のない光景だが、噎せ返るような鉄の・・・血のニオイが現実だと小屋にいる全員に教えていた。

「て、てめえ・・・裏切る気か！？」

「ああ、どうも俺の流儀に合わなくてな」

「ひっ・・・　わ、わかってんのか？　お前みてえな仕事は信用が大事なんだろ！？」

「ふん、死人に口無しって言葉・・・　知ってるか？」

次の瞬間、言葉もなく残りの三人が肉塊になった。
目の前で人が原型も残さず死んだシャルロットは呆けていた。
血のシャワーを浴び、着ていたドレスは真紅に染まった。

（わたし・・・死ぬのか・・・・な？）

黒尽くめの男が近づいてくるのが見える。
よく見ると、男の手には指揮棒のような杖が握られており、その杖から無数の糸が伸びている。
どんな魔法か分からないが、ピアノ線のようなその糸で斬り殺したのだろう。
ピアノ線ですら使いようによっては十分な殺傷能力を持っているのだ、ましてや魔法の糸、人を斬れても不思議ではない。

（でも・・・　これで父さまの所に行ける・・・のかな？）

魔法の糸が首に巻き付くのを感じながらも、シャルロットの震えは徐々に治まっていった。
男の顔、瞳を覗きこむ。
これから自分を殺すであろう人の顔を見ておこうと思ったのだ。
シャルロットが感じたのは・・・・・闇、だった。
まるで全てを呑み込むかのような闇。
その闇に比べれば、自分の今の状況など、どうでもよくなってしま

うような、月も星も、何もかもが浮かんでいない漆黒の夜空のような瞳。
そこからは、何の感情も見えない。
何事にも動じないと感じさせる瞳に、シャルロットは見いった。

「お前・・・・・笑ってるのか？」

「え？」

男の言葉で、ようやくシャルロットは自分が笑っている事に気付く。

「は、はは・・・　わたし、ここで死んじゃうみたいですし・・・」

そう言って目を閉じるシャルロット。
次に目を覚ましたら、天国だと良いな、と思いながら最期の時を待つ。
そして・・・・・手足を縛っていた縄、そして腰ほどまで伸びていた髪がバッサリと斬れた。

「ッ！　・・・・・あれ？」

斬れた髪は肩に掛かる程度まで短くなり、手足は自由を取り戻した。

「お前、面白いな。　・・・・・生きたいか、小娘？　生きるか死ぬか、選ばせてやる」

・・・・・これが、この男との血の臭いしかしない、最悪の出会いだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0849q/

BLUER THAN THE SKY

2011年2月3日11時14分発行